

シンポジウム「アメリカ文学と終末論的想像力」

2023年7月16日（日） 14:00~17:00@北九州市立文学館

概要

訪れない救いを待つ——メルヴィルによる黙示録の変奏

鈴木一生（九州工業大学講師）

この世の終わりとなつた新たな世界の出現を預言的に啓示する『ヨハネの黙示録』は、新約聖書の中でもひととき異彩を放ち、そこに含まれる千年王国の概念をはじめとする数々の特徴的な要素が多く、文学者たちを魅了してきた。アメリカ文学を代表する作家 Herman Melville (1819-91) もそのひとりであり、とりわけ *Pierre; or, The Ambiguities* (1852) は、主人公ピエールが『黙示録』よりも深い神秘を示してみせると高らかに宣言するように、同書の影響が色濃く見られる作品である。今回の発表では、その難解さゆえ今なおアメリカ文学研究者からの評価もわかる『ピエール』が、『黙示録』を下敷きにした啓示文学の側面を持ち合わせることを確認したうえで、この世における神秘や福音の立ち現れ方を一貫した原理で描いたメルヴィルの芸術的手腕に光を当ててみる。そうすることで、アメリカ史におけるピューリタニズムの終末論的レトリックを体系的に論じる際には欠かせない研究書である Sacvan Bercovitch の *American Jeremiad* が、『ピエール』の物語を駆動させる枢要な二項対立的構図、すなわち至福千年を説く使徒教会の教祖プリンリモンのパンフレットにより象徴化される天/地のルールをめぐる対立と和解を同書の通奏低音として引用した意義を再検討し、メルヴィル研究の立場からアメリカ文学と終末論的想像力について論じるための一視座を提供することができる。

終末後の世界におけるサバイバル術——アメリカ版ポストアポカリプス文学を再考する

城戸光世（広島大学）

19世紀前半のアメリカでは「第二次大覚醒」と呼ばれる大きな信仰復興運動が起こった。その派生の一つと言われるキリスト再臨待望論も同時期に広がり、その主導者であったウィリアム・ミラーがキリストの再臨と世界の終末を1843年と予言するなど、終末論的な言説が当時一世を風靡した。作家ナサニエル・ホーソンもまた「新しいアダムとイブ」といった短編で、文明崩壊後の廃墟をさまよう少数の人間だけの世界を想像している。19世紀前半にこのような終末論が広まった背景には、「夏のない年」とも呼ばれた異常気象の出現や、コレラなど感染症の爆発的広がり、1837年恐慌と称される金融危機など様々な要因がある。こうした19世紀前半のアメリカと、パンデミックによる既存社会の変容を経験した21世紀の現在の状況には、意外なほど共通点が多いように思われる。19世紀のロマン主義文学から、終末後の世界を描く作品が数多く登場している21世紀の現代文学まで、作家たちは文明や人間社会が崩壊した後の世界をどう想像してきたのだろうか。本発表では彼らの「その後の世界」を描いた文学の系譜を概観し、終末後の世界を生き抜く人々がどのように描かれているのか、「宗教」を一つの軸として検討してみたい。

アメリカ大統領と終末論的想像力

巽 孝之

(慶應義塾大学名誉教授／慶應義塾ニューヨーク学院長)

1970年代末、アメリカ文学研究を始めたころに魅了されていたのは、三冊の「終わり」をめぐる批評理論書だった。一つはケンブリッジ大学教授フランク・カーモードの『終わりの意識』 *The Sense of an Ending: Studies in the Theory of Fiction* (1967)、もう一つはトロント大学教授ノースロップ・フライの『世の精神』 *Spiritus Mundi: Essays on Literature, Myth and Society* (1976)、そして極め付けはハーバード大学教授サクヴァン・バーコヴィッチの『アメリカのエレミヤ』 *The American Jeremiad* (1978)である。まだ新批評の影響が冷めやらぬ時代に、キリスト教終末論的想像力の根本を成す予型論 (typology) を導入すれば、弁証法的な物語学に根ざす西欧文学テキストの多くを読み解けることが判明した時には、少なからず興奮したものだ。とりわけ予型論の修辞学が西欧的な歴史学と不可分の関係を結んでいることを明かしたバーコヴィッチの方法論は、ポー、ホーソン、メルヴィルに代表される19世紀ロマンティシズムからディック、ピンチョン、エリクソンら20世紀ポストモダニズムに至る文学思想史を記述するのに欠かせない。

とはいえ、1960年代から70年代にかけてこうした終末論的想像力の理論が勃興し一定のリアリティを持ちえた背景には、1963年のケネディ大統領暗殺から74年のウォーターゲート事件に端を発するニクソン大統領辞任に及ぶパラノイ德的陰謀妄想が介在していたのではないか。大統領史が文学史を生み、文学史がアメリカ史を紡ぎ直す。その創造的な批判的相互交渉の歩みをスケッチしてみたい。

(なお、齊藤園子先生の概要につきましては、後日掲載いたします。)